京都大学	博士（文学）	氏名	髙田 映介
論文題目	世界の瞬間――チェーホフの詩学と進化論		

（論文内容の要旨）

アントン・チェーホフ（1860－1904）は、ロシア文学史上、および欧米における短編小説史上に革新的な一歩を画し、また二〇世紀の不条理劇にも通じる新しい形式の劇作を残した、十九世紀ロシアを代表する作家のひとりである。チェーホフの創作については、ロシア内外を問わずこれまでにも多くの研究がなされ、多くのことが語られてきた。そうした中で、いつしかチェーホフ研究の大前提となってきたのは、「作家は問題を解決せず、提示するのみ」と明言した彼の「文学的客観性」である。しかし、それが充分に説得力を持ち、了解可能な前提であるからこそ、チェーホフの詩学を探る際に、問題のすべてがこの前提によって説明されてしまう傾向がありはしないか。本論文は、「観察者チェーホフ」の客観性それ自体を改めて検討に付し、そのために従来の研究では取り上げられてこなかった考察の視座として、科学、とりわけダーウィンの進化論に着目している。

もちろん、科学的知見を安易に文学分析に持ちこんだり、チェーホフの創作の全部をそれによって説明しようとしたりするのではないが、その一方で、科学は我々の思考の枠組や世界像と無縁のものではあり得ない。そもそも、勃興期の近代科学による世界の成り立ちを探る試みの根底にあったのは、聖書の「創世記」だった。それも「創世記」からの脱却が目指されたのではなく、むしろそこに書かれている事柄こそが自然界の起源の真の説明であることを証明しようとしたのである。このことを踏まえるなら、ダーウィンの進化論が十九世紀の人々に衝撃を与えたのは、純粋に非目的論的な過程である自然淘汰によって生命の多様性を説明するその方法が文化の領域に持ちこまれた際に、選ばれしものとしての特権的立場から人間を追いやり、自然から慈悲深さを奪い、神の意志も何らの目標も計画も存在しない荒涼とした世界を想起させたからに他ならないことに気づかされる。ダーウィンの進化論の最大の特徴は、それが持つ非目的論的性格と、人間に一般的な目的論的思考との間にずれを生ぜしめずにはいない点に存している。チェーホフがダーウィンに関心を寄せていたことについては、伝記的事実としての指摘は以前からあったが、ダーウィン進化論との並行性、同時代性という観点からチェーホフの詩学を包括的に捉えようとした試みは、これまでなかった。

本論文は序論と五つの章、そして結語から成る。序論では、チェーホフの「文学的客観性」という主張と実践が「科学的客観性」と接続していたことを作家自身の書簡から明らかにし、人間の主観的感覚から遠ざかった視座に立脚している点に両者の類

似点があることを指摘している。そのうえで、論考全体の構成と、その中での各章の位置づけを示している。

第一章では、主に初期の諸短編を対象として、先行世代あるいは同時代の作家とチェーホフの影響関係を考察している。まず、思想・文学上の指導的理念を喪失した一八八〇年代という時代の特徴を、文学作品から哲学論、社会評論に至るまでが掲載されていた「分厚い雑誌」から、大衆的な新聞・雑誌（「小さな刊行物」）へと主力が移行した、この時期のメディアの変遷という観点から論じている。そして、新聞やユーモア雑誌の書き手だった八〇年代作家たちに当時向けられた否定的評価を手がかりに、状況の簡潔な呈示、滑稽さや偶然性に左右される筋、偉大ではない主人公像といったチェーホフの創作上の特徴が、しばしば言われるような彼特有のものではなく、むしろ新聞やユーモア雑誌といったメディアの特性に規定された、「小さな刊行物」の書き手に共通したものだったことを明らかにしている。

一八八〇年代に急速に進んだメディアの大衆化と視覚化は、一八四〇―五〇年代に流行した際にはロシア社会にナショナリズムを作り出す手段と見なされた「生理学的スケッチ」を即物的ジャンルとして回帰させたが、科学的方法によって文学はすべてを解明し、描きだすことができる――言い換えれば、即物的な描写の積み重ねを通して、その奥にある「内面」や「本質」に到達できるという確信は、起源であるフランスの「生理学もの」の頃から、このジャンルの揺るぎなく一貫した前提だった。本章は、そうした八〇年代の風潮の中で、チェーホフが科学と文学に関するこのような前提を共有していなかったことを、観相学的記述を拒否した短編『青髭ラウールの手紙』等を例として明らかにしている。また、そのことが、文学には世界の全てを開陳する力はないという彼の確信と呼応していたことを指摘している。

第二章では、科学の客観性とチェーホフの世界像の類縁性について論じている。まず、生命の進化と種の由来を非人間中心主義的で非目的論的なものとして語った点がダーウィンとそれ以前の進化論との決定的な相違であることを述べた後で、ロシアにおいては『種の起源』着想の一因となったマルサスの人口論とも関連するかたちでダーウィンが受容された流れを追い、ダーウィンの思想が、わずかな例外を除いて、実際には非ダーウィン的な発展的進化観として受容されたこと、文学界においてはトルストイがダーウィンの思想の核心に迫ったが、歴史には法則原理が確実に在るが不可知であるという自分自身の確信と、歴史を偶発的なものとして記述するダーウィンとの相違のゆえに、最終的には進化論を棄却したことを示している。そのような中でチェーホフによって構想された学術論文「性の権威史」に関する作家自身の記述を分析し、ダーウィンの『種の起源』『人間の由来』と着想や構成の点で似通う面が多かったこと、自然淘汰のプロセスに対する的確な理解と非人間中心主義的思考とが見られることを指摘して、チェーホフがダーウィンの進化論の原理と語りを積極的に認めていたことを明らかにしている。

以上を踏まえたうえで、第三章以降では、チェーホフの詩学の具体的な分析に取り組んでいる。これらの章での関心の中心は、チェーホフにおいて創作の初期から顕著であったパロディ性や、作中で変化する人物像、ときにナンセンスに感じられるまでに因果関係を欠いた作中諸要素の断片性、結末の未完結性等、従来指摘されてきた彼の詩学の諸特性が、作品テクストのどのような構造や語りによって実現されているかということである。

第三章では、チェーホフの人物形象が「生理学的スケッチ」の社会的な諸タイプの形象の紋切型の意識的な使用を基本としていることを『小役人の死』等の初期短編に即して示したのち、チェーホフの中期以降の小説には、社会的な「型」を演じ、それに同化していた作中人物が「型」から逸脱するというストーリーがしばしば見られることを指摘した。たとえば、結末での主人公の倫理的な変化の唐突さが批判を呼んだ中編『決闘』では、対照的な二人の主人公が作中で似通っていく――すなわち、対照的な「型」を演じていた二人がまさに「型」への同化という点で類似していることが明らかになる過程で、「型」にはまりきらないものとしての「個」が立ち現れてくる。だがチェーホフの小説は、そのようにして現れた「個」に対して、生物の個体の限界性にも似て、その後の展開や展望が与えられないままに終わるのである。

人物の変化は、小説において、言うまでもなく物語の筋の展開、少なくともその一部として提示される。したがって、それが未完のままに取り残されることは、いわゆるチェーホフの「開かれた結末」の問題に通じている。第四章では、第三章で指摘した人物像の変化の問題が、チェーホフ的な物語構造および語りという観点から捉え直されている。たとえば短編『イオーヌィチ』では、若く理想に燃える青年医師の肥満した守銭奴への変貌が描かれる一方で、その原因や動機の説明は回避されている。語りの上で因果性を欠いているために、チェーホフの作品世界にあって人物の変化は、ダーウィンにおいて進化がそうであったように、前もって知り得たり予定されていたりするものではない。大団円も問題の解決も見られないようなチェーホフの物語の断片性、未完結性といった特徴は、出来事が積み重なって、ある結末に至るようなストーリーの累積的進行が見られる一方で、そのようなストーリーの全貌を語り尽くさないかたちでプロットが語られるという、語りの構造的な特徴と密接な関係にある。

第五章では、このように作中人物が行き止まり、その変化が明確な結果を結ばないという特徴を踏まえつつ、チェーホフの作品の時間・空間構造を論じている。人物が今いる場所とは異なる理想的な別の時空間を憧憬するというチェーホフに特徴的な「逃避」のモチーフが、しかし実際には空間上の移動としてではなく、彼らの言語や時間感覚を通じて生じていることを、後期の『百姓たち』『新しい別荘』『谷間』等に即して明らかにしている。さらに、傑作と言われる『僧正』に見られる、くり返し起こった出来事と、一回しか起こらなかったか、出来事の内容としてくり返し起こりようもなかった出来事が混在するような語りの分析も試みているが、このような時間

的錯綜もまた、人物の知覚を介した語りによって初めて可能なものである。チェーホフの作品では、人物の人生が豊かなその全貌を過去と現在が重なり合ったかたちで示される正にその時点で、その人生に関する記述が行き止まる。その一方で、時間は個々の人生とは関わりなく流れ続けていくのであり、いわば時間が二重構造になっているのである。

チェーホフの時空間にあっては、行き止まり、消え去る個体の「人生」と、くり返し孕みつねに未来を志向する自然の「生」という二つの異なる次元が存在している。そこで注目されるのは、人物が自然の内にある「本当の生活」や「真理」を一瞬垣間見る、いわゆる「抒情的逸脱」の場面が、チェーホフの詩学において持つ意味である。従来の研究では、彼の「抒情的逸脱」は、語り手が作中人物を自然に内在する美や真理に触れさせるものと見なされてきた。だが本論文は、「抒情的逸脱」を、上で述べたような「逃避」のモチーフと重ね合わせて、作中人物が欲する「今・ここ」にはないものを、彼ないし彼女の知覚が自然の内に描き出すものとして捉えている。「抒情的逸脱」において、自然は、ダーウィンの進化論が描き出したような、人間に対するはからいをもたないものとして立ち現れ、その内実は語られず、空虚なままに残されている。しかも人物から自然へ向けられたこのような目的論的なまなざしと、語りが自然を語る際の非目的論なまなざしの交差は、一連・一体のものとして示されている。チェーホフ作品の語りのまなざしは、人間的な見方と俯瞰的な視線とに二重化しているのである。

以上を踏まえて、結語では次のことを指摘している。

人間的な見方と俯瞰的な視線の交接点としての人物を介して浮かび上がるのは、時間的・空間的現在――「今、ここ」のただ中で人物が世界を認識しようとする一瞬のありようである。こうした認識を裏打ちしている問いは、人間が有限の時と断片的な空間を生きる存在である以上、容易に答が得られる性質のものではない。世界を非目的論的なものと捉えるなら、それを明らかにすればすべてが解決されるような初源的なものなど、そもそも存在しないとも考えられよう。しかしながら、遡求すべき「何か」がたとえ存在しないとしても、その空白がもたらす落胆が人間のものである限り、ダーウィンの進化論がその非目的論的な世界像によってわれわれの人間的な感覚や想像力を刺激してやまないことにも似て、問いはなおくり返される。

このように、二重化したまなざしの中で、人物が世界を認識し、世界に住まうそのあり方を描く点に、チェーホフの詩学の独自性が存するというのが結論である。本論文は、チェーホフの人物造形、物語構造、そして時空間の性質を、同時代に深甚な影響を与えたダーウィンの進化論の世界観と語りの構造と並行的に捉えることによって、有限である人の生と大いなる自然の生との間に埋め尽くせない空白をそのままに残すようなチェーホフの世界観と詩学を理解する際の手がかりを呈示している。

（論文審査の結果の要旨）

本論文の対象であるアントン・チェーホフは、19世紀末から20世紀初頭のロシア文学を代表する小説家・劇作家である。彼の作品は今日に至るまで世界的に読まれ、上演され続けており、したがって先行研究にも膨大な蓄積があるが、その評価は「滅びゆく旧世界への挽歌の歌い手」「思想なき写真師」「虚無の思想家」ほか、当初から分裂し、多岐に渡っている。20世紀後半には、チェーホフ文学におけるグロテスク、ナンセンス、コミュニケーション不全等の要素が重視され、彼をベケットなどの不条理文学の先駆と位置づける見解も現れた。近年では、カルチュラル・スタディーズやメディア論の観点から、彼の創作活動と1880年代以降ロシアでも急速に発達した大衆ジャーナリズムとの関係が注目されている。だがこれらの論考は、その大部分が、論者が特定の立場からチェーホフの或る一面に光を当てたものである。このように様々な解釈を惹起するこの作家の多面的な全貌を包括的、整合的に捉えようとする試みは、これまで必ずしも多かったとは言えない。

こうした中で本論文は、19世紀後半のロシアにも深甚な影響を与えたダーウィンの進化論との同時代性、並行性を大枠として、チェーホフの世界観と詩学を体系的に首尾一貫したかたちで記述しようとした意欲作である。チェーホフがダーウィンに関心を寄せていたことは、伝記的な事実としてはこれまでにも指摘されることがあったが、それがなぜなのか、そのことがチェーホフの詩学（世界観、作品の構造、語りの仕組み等）といかなる関係にあったかにまで踏み込んだ考察は、おそらく世界的に見ても本論文を嚆矢とする。

序論において、モスクワ大学医学部在学時に、当初は学費と生活費を稼ぐ目的で小説の執筆に手を染めたチェーホフが、自然科学に多大な関心と理解を有していたこと、また文学に倫理性と思想性を求める近代ロシアの文化的風土の中で彼が「文学は問題を解決するのではなく、提示するのみ」と主張した際に、人間の知覚や主観を離れた自然科学の方法に依拠したレトリックを用いた事実を指摘した後、論者は５章にわたって考察を展開している。

第１章では、大衆化と視覚化が急速に進んだ1880年代ロシアのメディア環境の中で、この時期の文学に支配的だった「生理学的スケッチ」や「一幕劇風」等の手法を初期のチェーホフが同世代の作家達と共有していたこと、ただしそうした手法を通じて教訓を読者にもたらそうという啓蒙的な意図を秘めていた後者とは異なり、チェーホフが状況や社会的タイプの即物的・表層的な描写に徹していたことが指摘されている。第２章では、ダーウィンの進化論が19世紀の思想や文学に強い衝撃を与えた主要因が、生命の進化と種の由来を非人間中心主義的で非目的論的なものとして描き、世界を無法則なものとして語った点にあったことが確認された後、19世紀後半のロシアでダーウィンの進化論が合目的的・合法則的な発展的進化観としばしば混同されて受容された中で、チェーホフがダーウィンの非目的論的世界観を的確に把握し、これに

共感していたことが、彼の学術論文構想に即して立証されている。

このように当時のメディア環境、思想的な文脈とチェーホフの関係という、いわば外的な問題を考察したうえで、論者は第３－５章では代表的な中短篇の内在的な読解に転じ、チェーホフの詩学の諸特徴を導き出している。すなわち、①既存の社会的な「型」への作中人物のまねびが破綻することによって、その人物の「個」が立ち現れてくるが、そのような「個」のその後の展開や展望は語られることなく、物語が未完のまま打ち切られること、②作中人物の変化の記述の断片性、変化に関する因果論的な説明の欠如、③作中人物は現在とは違う時空間への移動を夢み、憧憬を語るが、自身は決して「今、ここ」から脱出できないこと、等である。

これらの特徴から、論者は限りある人間個々の生と、人間には把握しきれず、したがって法則性や目的の有無さえも定かではないが、しかし流れ続けていく自然の生との二重性が、チェーホフ的な時空間の基本的な構造であると指摘する。そして卑俗な日常生活を一時的に脱した作中人物が触れる崇高な自然に対する礼賛の凝縮的表現と従来見なされてきた、チェーホフの後期諸作品の所謂「抒情的逸脱」の場面が、人物から自然へ向けられた目的論的なまなざしと語りが自然を語る際の非目的論なまなざしとが交差する場であるという新解釈を打ち出している。以上のような考察を踏まえて、結語においては、人間的な視座と俯瞰的な視座とが二重化したままに交差するチェーホフの詩学と、ダーウィンの進化論の語りとの相似性が指摘されている。

とは言え、論者は、チェーホフの詩学の起源を、ダーウィンの進化論に求めようとしているのではない。両者を、世界や歴史の合法則性・目的性への信が失われた時代の並行的な現象と捉えることを通して、これまで「無思想」「ナンセンス」「断片性」等の言葉で定義されることの多かったチェーホフを、有限である人の生と大いなる自然の生との間の埋め尽くせない空白を見据え続けた作家として包括的、論理的に描き出したのである。このことは、従来の研究と一線を画した本論文の独創であり、文献の緻密な読解と合わせて、高く評価できる。その一方で、各章の論述は緻密だが、各章相互間の関係が必ずしも十全には説明しきれていないこと、第２章で、論理構成上不可欠である以上に、ダーウィンの進化論の説明に字数を費やしていることなどは、短所として指摘しなければならない。しかし、これらは考察それ自体と言うよりも、むしろそれを記述する上での瑕疵であり、論者自身もよく自覚しているところである。今後の研鑽において克服されるだろうことが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2018年８月３日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとする。